

寄贈された鮭^{さけ}たたき棒

昨年末、平取町で使用された「イサバキクニ」というアイヌのサケ漁具を資料館に寄贈していただきました。関係の方々に深く感謝申し上げます。すでに資料館にもこの道具がありますが、実際使用されたものでなく複製品です。それでぜひ本物が欲しかったのです。

実は、この道具は、毎年漁のたぎに新調され、古いものは幣場^{ぬさば}（神を祭る祭壇のある場所）に供えられることが多く、手に入りにくい資料なのです。

「イサバキクニ」とは「その・頭を・たたく・木」という意味で、「それ」とはサケのことだそうです。日本語では「鮭たたき棒」などと呼ばれます。アイヌの伝統文化では、サケをこの道具でたたいて殺さないとサケが来なくなると言われています。ですからこれはただの棒でなくサケの再来、豊漁を願う儀式用の道具とも言えます。そのため棒には儀式で使う

「イナウ（削り掛け）」と同じような加工があります。

寄贈品は3点で、長さ49cmから54cm、直径3cmから4cm。ヤナギの木で作られています。また3本とも別にイナウが付けられています。このような例は初めて見ました。平取地方独特の習慣なのかもしれません。これを除くと、寄贈品は標準に近い形をしています。ところで鮭たたき棒にはいくつもの謎があります。例えば、寄贈



図1:寄贈品(下 長さ54cm)



図2:鮭たたき棒使用イメージ

されたタイプの棒を標準に近いとお伝えしましたが、実は江戸時代までは野球のバットののような形をしていました(図3)。このタイプは紅葉山49号遺跡などで出土していて、ルーツが縄文時代にあると推定されます。おそらく明治時代以降、この形になったのでしょうが、正確な時期やなぜこの形に変化したかなどはわかっていません。

(石橋孝夫)

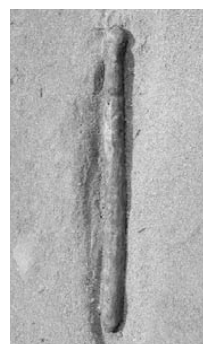


図5:紅葉山49号遺跡の
鮭たたき棒(長さ51cm)



図4:鮭たたき棒とサケ(森岡健治さん撮影)

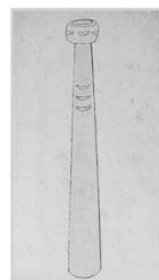


図3:江戸時代の
鮭たたき棒